

著者：若杉 葉子先生\*  
戸原 玄先生\*\*

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学  
\*助教、\*\*准教授

第6回



若杉葉子先生



戸原 玄先生

## 歯科衛生士の才能 素晴らしきかな

最近の訪問診療における歯科衛生士の活躍には目覚ましいものがある。口腔ケアのニーズに応じるだけでなく、摂食嚥下リハビリテーションを継続して行うことで機能を改善したり、絶食の患者さんを経口摂取可能な状態にまで回復させたりしている。今回は、そんな歯科衛生士の中から衛生士の仕事の枠に留まらず活躍している方を紹介する。

一人目は大阪で働く、自称「永遠の27歳美人ピアノ講師」の女性歯科衛生士。底なしに明るい彼女の持つ陽のオーラは半端なく、患者さんを元気にすることにかけては右に出るものがない。得意のピアノやリトミック（音楽教育法のひとつ）もリハビリに導入し、動かない舌をいかに動かすか、どうやったら食べられるようになるのか、やる気や生きる喜びをいかに見出すかを懸命に考え、天性のセンスで患者さんの笑顔を引き出す。

先天的肺動静脈瘻により若くして左右中大脳動脈領域に脳梗塞を発症し、胃瘻で絶食、失語、重度失行を患い、流涎も<sup>りゅうぜん</sup>多く、家から出ることもなかった患者さん（63歳女性）に対して、6年間介入し、1日2食を食事で摂取できるまでに回復させた。さらには、食べられるようになったことに自信を持たせ、外にでてみようという気持ちを引き出した。この患者さんは昨年、念願だった海外旅行に行くことができた。私

は学会発表のポスター作成を手伝ったが、そのポスターに載せた患者さんの笑顔とリハビリ中の二人の表情を忘れることができない。

もう一人は東京でフリーランスで活躍している歯科衛生士。口腔ケアや摂食嚥下リハの技術もさることながら、彼女は麻痺や寡動で筆談のできない患者さんの手を補助し、書きたい方向に紙を少しずつ動かすことで、患者さんの意思を書かせることができる。話すことも書くこともできない患者さんは、彼女の支えにより、何がつらい、何が食べたい、喜怒哀楽、感謝の気持ちを表現できるようになった。

交通外傷で遷延性意識障害だった患者さんは、彼女の介助により今までの感謝を書くと同時に、自分に理解力があること、人として扱ってくれたことの喜びを表してくれた。同様の障害をもつ別の患者さんは、大好きな楽器の演奏を聞きに行きたいことを伝えることができ、家族や沢山の友人、主治医、看護師の手を借りて演奏会に行くことができた。

いずれも職を超えた才能を発揮し、在宅の患者さんを支えている。このように医療的な技術だけでなく、人としての関わりが生活そのものを支えることにつながっている。そんな在宅診療がより充実したものになっていくことを願ってやまない。



食事摂取を可能にし、笑顔を引き出す。



筆談の補助をして患者さんの意思を訊く。